第58号　50円
昭和54年1月25日

内　容

科学と社会…… 1
共同セミナー100回記念の集い … 2
祝辞に寄せて―来賓感話…… 3
第100回記念大学共同セミナー … 6
第100回記念シンポジウム …… 7
マスコミの視点から…… 9
事業部だより……10
千人会……12
館長日記から……13
利用状況…… 13,14

セミナー・ハウス
SEMINAR HOUSE NEWS

発　行
財団法人　大学セミナー・ハウス
≪所在地≫
東京都八王子市下柚木
（〒192-03）
電話　0426-76-8511～3
振替口座　東京　74590番
≪東京事務所≫
東京都中央区日本橋本町3-3
三井銀行本町支店ビル5階
電話　東京（241）3961
編集・発行人　飯田宗一郎
製作　中央公論事業出版

科学と社会

科学者社会の形成に向かって

日本学術会議会長　伏見康治

私は、かねてよりハンガリーから非常に多くの優秀な学者が輩出していることに興味を抱いていた。コンピューターの祖である数学者フォン・ノイマン、原子爆弾のきっかけを作ったレオ・シラード、量子力学のウィグナー、そして水爆の父と呼ばれるテラーというように、二〇世紀半ばに世界の人類にきわめて大きな影響を及ぼしたこれら四人の学者が私の念頭にあったからである。かれらはブダペスト出身の、しかもユダヤ人である。

フン族に語源を発しているハンガリーは、元来、ヨーロッパとアジアの境目に位置しており、西欧とはまったく異質の文化を持つ、人口約一、〇〇〇万人、首都ブダペストに二〇〇万人が住んでいるという小さな国である。

一年前、私はブダペストで開かれたある会合で、ICSU（International Council of Scientific Union）の会長シュトラウフ氏に会ってこの点をたずねたところ、「大変良い質問なので十分考えて、一年後に答えを出しましょう」といわれ、今夏、ヨーロッパで行われたIUPAP（International Unions of Pure Applied Physics）とICSUの会合で再会して、約束の答えをもらった。

実は、ユダヤ人の女流作家であり、歴史家のローラ・フェルミが、『The Illustrious Immigrants』（華麗なる移住者たち）という著書の中で、同様の問題を提出している。これは第二次大戦の前後にかけてヨーロッパからアメリカへ亡命した科学者や芸術家――かれらはハンガリーの出身でドイツに学んだユダヤ人――を列伝風に書き記したものである。この本とシュトラウフ氏の答えを総合すると、次のように要約できる。

まず第一に、ユダヤ人は中産階級としてハンガリーに移り住んだ点である。当時、貴族階級は贅沢の限りを尽し、百姓は農奴として貧しい生活に甘んじていた。明日の食物にもこと欠く状態では、文化的活動の余裕は与えられないので、学者を発生させる土壌として中産階級であることは、きわめて重要である。

第二に、異民族であるユダヤ人には、一般的な出世コースは閉ざされているので、才能ある若者たちはこれに制約されない分野を求めた。それが科学であり芸術であった。

第三に、ハンガリーには、数学の出題に一般から解答を出させる懸賞制度があって、若い時から数理的なものに対する興味を喚起することができた。

そして第四に、ドイツから追われてアメリカ社会で生きていくユダヤ人には、家族や同窓会のような社会的な支えがなく、学問的業績そのものに頼るのが唯一のものであった。

以上は、社会が科学者に及ぼす影響の一例であるが、次に科学が社会に与える側面を、科学者社会Scientific Communityの形式の問題として考えてみたい。

ICSUが採用している大前提に、Free Circulation of Scientists、科学者は国境を越えて自由に学問的討論の機会が与えられる、ということがある。例えば、モスクワの国際的な学術会議の際に、ソヴィエト政府がビザを出さないケースがあった。これに対してパリに本部を置くICSUがソヴィエトのアカデミーと連絡をとりながら解決に当たった。私自身も日本で開催された国際会議で、南アフリカ問題に直面したことがある。日本の外務省は、国連の決議に従って人種差別政策を行う南アからの参加者にビザを出さないという方針を出した。結果として、外務省はビザを出したが建前は崩さない、という実際的な解決をみた。この種の問題では、一つの倫理的綱領を貫こうとすると、他の原則と衝突してしまう場合がしばしばである。相反する二つの原則をどう融和させるかは、その都度、具体的に事を処していく以外にない。

また、別の原則にPursuit of Science、科学的探究を守ろうということがある。例えば女性であるがゆえに職場が与えられない、ユダヤ人であるがゆえに迫害される、というような場合であるが、解決のきわめてむずかしいものに政治的信条がある。Free Emigration、自分の国籍を捨てて他の国の国籍がとれる自由、という別の原則がその解決になる。しかし、この原則は発展途上国における頭脳流出が深刻化する中で、ついに看板を下ろすことになったのである。

最後に、日本における科学者社会のあり方を、学術会議の歴史を通して考えてみたい。日本学術会議は、三〇年前、片山内閣の時に設立された。会員二一〇名が全員選挙によって選出されるという組織は世界に類がない。主な役目はまず第一に、科学者の立場で議論したものの中から、政府の施策として適当なものを取り上げて勧告することがある。例えば三年前にスタートした岡崎の分子科学研究所は二〇年前に設立を勧告したもので、概して長い年月を要するが、中には割合い早く現実化するものもある。筑波の高エネルギー

（5ページ4段目へつづく）

●大学共同セミナー第一〇〇回記念の集い

発展的プロセスの成果を評価し、喜び祝う

昭和53年10月8日（日）

国公私立大学39校から一三〇名の学生が参加して開催された記念すべき第一〇〇回大学共同セミナー「21世紀に向かって――学問と人間の問題」（別掲）の二日目、10月8日（日）には、簡素な中にも一〇〇回の歩みを喜びをもって回想し、次の一〇〇回に向かう意欲に満たされた記念の集いがもたれた。

好運にもこの一〇〇回記念のセミナーに参加した学生たちに加えて、各方面で社会人として活躍しているOB・OGたち、かつて指導教授として協力された先生方、そして外部から協力を惜しまなかった人々が、この記念の集いに来賓として参加され、大学共同セミナー一〇〇回の歴史と共に創り出した大学セミナー・ハウス今日の姿を現出してくれた。

まず、食堂で開催された記念昼食パーティで乾杯の音頭をとられた日本学術会議会長の伏見康治先生は、「セミナー・ハウスが今日のように持続し発展し得たのは、それを自ら実行に移し推進してきた一人の人間の強烈な個性とリーダーシップがあったからである」とのあいさつをされた。

ついで会場を講堂に移し、この種の式典には欠かすことのできない名司会者、共同セミナー委員会委員長の岡宏子先生の司会で記念の式典がもたれた。共同セミナーOGの伊藤薫さんのピアノ独奏によって始められ、飯田館長は別記のごとき挨拶を述べ、多くの協力者・指導者の中から、古稀を迎えられた板垣與一氏と国際交流基金賞の栄誉を得られたJ・L・スチュアート氏に、お祝いを兼ねて感謝の花束を贈呈された。

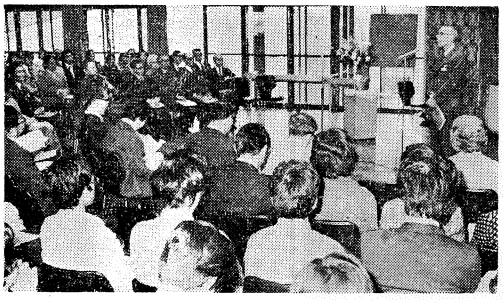
ついで、来賓として前国連大使斎藤鎮男氏、かつての共同セミナー指導教授を代表して東大名誉教授前田護郎氏、若手の指導教授を代表してICU準教授の横田洋三氏と慶応義塾大学教授山岸健氏、地元協力者を代表して八王子市長後藤聰一氏、かつての共同セミナー参加者で、現在社会人として活躍している卒業生代表として東工大助教授長松昭男氏、上智大助教授長島正氏、通産省の安宅光雄氏が、それぞれのお立場より、ユーモアを交えて大学共同セミナー一〇〇回の偉業を讃え、次の一〇〇回に向けての期待を述べられた。

中央大学教授の夫人、熊田達子さんは、最後に立って、「飯田館長に対するお礼の言葉は、とてもロでは言いあらわすことができません」と、その気持を花束に托して飯田館長に贈られた。

この式典の司会者岡宏子先生は次のような言葉で結ばれた。「今日のこの瞬間から、次の一〇〇回に向かって歩み出すわけですが、たくさんの先生方が変らない共感と館長の説得によって集まってくるでしょうし、参加者の皆さんも、ここに植樹するだけでなく、心の中に木を植えて帰られ、それが次から次に伝わっていくであろうことを予言して結びの言葉としたい」。

引続いて開催された記念シンポジウムも、別記（7～9頁）のごとくそれぞれの学問分野を代表する四人の碩学によって、格調の高いシンポジウムとなり、参会者に対し、21世紀に向かってそれぞれが心のうちに考え、行動すべきことへの指針を与えるものであった。

秋の一日、夕ぐれまで交友館での談笑の集いが続いた。この記念の集いこそ学問との出合いを経験した人々だけがかもし出す交歓のあかしであるとは、若い千人会員達の感想であった。



式典：100回の成果を盛況裡に祝う

来賓：手前右から板垣，伏見，渡辺，小谷，後列右から村山，スチュアート夫妻の諸氏

【主なる出席者】（順不同・敬称略）

斎藤鎮男，J・L・スチュアート夫妻，前田護郎，伏見康治夫妻，板垣與一，渡辺格，佐伯彰一，岡宏子，野田春彦，坂本賢三，中村桂子，小谷正雄，村山松雄夫妻，後藤聰一，横田洋三，山岸健，三宅彰，荒井良雄，色川大吉，石塚司農夫，長松昭男，長島正夫妻，安宅光雄，原一雄，神保信一夫妻，神山妙子，熊田陽一郎夫妻，椚国男，大即英夫，川原栄峰，菅野暁，東條秀光，中村哲也，山田欣司，武藤聰雄，吉田美穂子，飯田修，高橋清，長谷川昭彦，林宏幸，村上光雄，松崎義徳，桑山真知子，土田美芳，酢屋善治，他共同セミナー卒業生約三〇名

◇記念の集いプログラム◇

昭和53年10月8日（日）

▼記念昼食パーティ（12時）…食堂
＜乾杯＞日本学術会議会長　伏見　康治

▼記念式典（13時）……講堂
＜司会＞聖心女子大教授　岡　宏子
○ピアノ独奏
国立音楽大卒業生　伊藤　薫
シューマン幻想小曲集より
In der Nacht
○挨拶と感謝　館長　飯田宗一郎
○花束贈呈
一橋大学名誉教授　板垣　與一
アジア財団日本代表
J・L・スチュアート
○メッセージ
前国連大使　斎藤　鎮男
東大名誉教授　前田　護郎
ICU準教授　横田　洋三
慶応義塾大教授　山岸　健
八王子市長　後藤　聰一
東工大助教授（OB）長松　昭男
上智大助教授（OB）長島　正
通産省繊維高分子材料
研究所員（OB）安宅　光雄
中央大教授夫人（OG）
熊田　達子

▼記念シンポジウム（14時）…講堂
＜司会＞聖心女子大教授　岡　宏子
＜発題者＞
日本学術会議会長　伏見　康治
一橋大学名誉教授　板垣　與一
東京大学教授　佐伯　彰一
慶応義塾大学教授　渡辺　格

▼お茶の会（15時30分）……交友館

○祝辞に寄せて……来賓感話

フォーリン・プレスセンター理事長、前国連大使
斎藤鎮男

私は今日、板垣與一先生のご講義をうかがっていて、非常に感銘を受けましたのは、南北問題に関連して、これから新しい秩序を作っていく、南北問題というのは南の問題としてだけでは解決しないのであって、南と北とを一つにして考えなければならないということを言われたことであります。

この問題とセミナー・ハウスを結びつけて考えますと、私は、一つには学問を政治学、経済学、自然科学というように別々にするとしても、学際的に考える態度が必要であるということ、また学際的な雰囲気の場所が必要ではないかと考えておりました。

たまたま、先程もスチューアートさんと話したのですが、アメリカにはセミナー・ハウスのようなものはない。ないのは当然であって、各大学自体が広いキャンパスをもっており、教授の交換とか講義の交換を行っている。まさにそういうものは日本の大学にはないので、そうした雰囲気をもつ場所として、このセミナー・ハウスは非常に重要な組織ではないかと思います。板垣先生の講義と関連して感じたことをご披露申上げて、私のメッセージといたします。

東京大学名誉教授
前田護郎

本日は共同セミナー一〇〇回を迎えられおめでとうございます。先程もお話のありましたとおり、開かれた大学ということと財政の問題とに、一〇〇回に至る歴史は要約されると思います。

新制大学が旧制から切りかえられたときに、大学院をどうするかについて大変な論議がなされました。国立では昭和28年に新制大学院が発足しました。その頃、東大の大学院は東大の学部卒業生だけに限るべきだという意見の人が多かったのですが、私たちは大学院と学部とは違うので、入試をやって全国の大学生ばかりでなく、外国の大学の学部卒業生にも平等の資格を与えるべきだと主張しました。私はそのために大変悩み、にらまれ、きらわれたのでありますが、このセミナー・ハウスで「開かれた大学」ということを聞くと胸がスッとするのであります。

残念ながら、日本の国全体がまだ閉ざされた国であると言わざるを得ません。開かれた大学というのは、日本で開かれているばかりではなく、アジアの隣りの国々に、そして世界全体に開かれた大学でなければならないのであります。大学も日本という国もそのような開かれたものとなるよう祈り求めたいと思います。

次に財政の問題ですが、新制大学院発足当時は、予算なしでやれという風潮でありましたが、経済成長のおかげで、やや良くなったとはいえ、まだまだ大変な問題を抱えていると思います。大学の前途は必ずしも楽観を許しません。しかし、私は楽観はしないが悲観もしていない。例えば、大正年間にあった経済成長により、学校を急激にふやしたための問題が多々あったのですが、それを何とか克服して、当時の旧制高等学校・専門学校によって今日の新制大学の基礎が据えられたこともあるので、現在の大学も問題を多くもってはいるが、これらを克服して、ある目標に到達しうることを私は願っております。

国際基督教大学準教授
横田洋三

私はセミナー・ハウスとは、大学教員懇談会、共同セミナーの企画委員、国連セミナーの運営委員やセクション演習の担当ということで、かなりいろいろの形でかかわりを持ってきております。

私はたびたびセミナー・ハウスに行くと言って出かけますので、留守に電話をくれた人から、「君は自分の専門の研究や時間をさいて、そういう立派な奉仕活動に参加しているのは感心だね」と言われることがよくあります。私は「いや、とんでもない。実は私がセミナー・ハウスに関係しているのは、私にとって大へん楽しいことだし、その上、実は私にとっては勉強になるんですよ」ということにしています。多くの人びとはセミナー・ハウスは善意によって維持されていると思っておられるでしょうが、私にとっては大へん利己的な目的のために役に立てているという面があるのです。

それに加えて私が何か奉仕をしていると思って下さるならば、こんなに有難いことはありません。

今後も続けてセミナー・ハウスとかかわりをもたせていただきたいと願っております。

慶応義塾大学教授
山岸健

私は「ロビンソン・クルーソーと現代」と「日常生活」という二度の共同セミナーのお手伝いをさせていただきました。私はここに来るのが大へん楽しみであります。多くの大学の学生たち、専攻を異にする教授たちや研究者と、自由に話ができるということで、実は八王子の丘に足を向ける時はとてもうれしいのです。

多分ここにおられる多くの方々が同じ喜びを味わわれたのではないかと思います。考えてみますとセミナー・ハウスの存在は非常に重要な意味があると思います。例えば、大学と大学教育とか、あるいは人生と日常生活とか、私が生きて在るとか、これからの生活設計とかを考えてみますと、そういうことの原点において、セミナー・ハウスが私の日常生活で大きな座を占めていたということに気づくのであります。

ここであればこそ、まさに一つの大学では到底思いも及ばないような、非常にクリエイティブな新しい実験や活動が可能であります。それに加えて心のふれあいがあるのです。

もう一つ重要なことは、ここに来た学生、教授、研究者、そして社会人も、ここを自分にとっての故郷にできたのではないかということです。

今後のことは、飯田先生のご尽力や多くの方々の援助、真面目な能力ある学生の協力によって、益益強力な歩みを続けると信じます

が、私が最後にお願いし、また自分に言いきかせておきたいことは、この八王子のセミナー・ハウスの丘は、やはり日本の社会で最も重要な一つの聖地であるべきだということ、同時にここは、私たちにとって、ますます重要な故郷として大きな発展をしてほしい。それを私どもは、ここを離れているときも、心から見守り、そしてささやかな協力を誓いたいということであります。

八王子市長
後藤聰一

大学共同セミナー第一〇〇回をお迎えになり、心よりお祝い申上げます。セミナー・ハウスとは創設以来ゆかりの深いものがありましたが、私は活動内容は飯田先生がすべて進めておられますので、行政の力でなすべきことは、自然環境を守ることではないかと思っております。

ちょうど多摩ニュータウンの西部開発というものが五年前から話しあわれ、昨年11月にようやく都知事との間で、たくさんの条件をつけた上で、総論賛成ということになりました。これから各論をつめていくわけですが、私どもはできるだけ自然を残し、赤裸にしないように、そして丘陵は丘陵のまで家が建つではないかと申上げているのであります。これは私どもに課せられた大きな課題であると思っております。

そういう環境作りの中の中心として、このハウスが永久に栄えますようお願い申上げると同時に、千人会という維持後援会を作っていただいておりますので、八王子を現在まで育てた千人同心の力のように、この千人会も千人と言わず一万人でも十万人になってもよいと考えますし、お金持の人にも入会していただいて、セミナー・ハウスの資金源になる必要があるのではないかと思います。

私どもも、そのために働きかけていくことをお誓い申上げて、私のご挨拶といたします。

東京工業大学助教授
長松昭男

私が卒業した東工大というのは理工科系の単科大学に近い大学であり、同じような人生観を有する男子学生ばかりが集ってくるので、どうしても人間関係が狭くなりがちでありました。そこにある飢えを感じていたときに、大学共同セミナーの掲示を見て飛びついた次第です。実存哲学とか宗教と科学の関係などについて論じあっているうちに、今まで自分の大学では得られない多種多様な人生観をもつ人々との裸のぶつかりあいを体験し、また、物質相手ではなく、精神あるいは人間を対象とする学問が、こんなに深いものであるということを初めて知って、電気に打たれたような衝撃を受けたことを、今でもはっきりと記憶しています。

あれから一三年、一〇〇回の共同セミナーに参加された八、五〇〇人の学生の方々も、多かれ少なかれ、同じような体験をもたれたことと思います。

その中でも、人生の方向の決定とか、生涯の伴侶の決定など、人間の一生に重大なかかわりをもった人びとが、私の周囲にもかなりおられます。

さらに、セミナー・ハウスの利用者延数は、五〇万人を越えたと聞きました。何もないところからこれだけの組織が作られたということもさることながら、一人の人間の意志が、五〇万人の人々に影響を与えたという事実は、まさに偉大なことであると思います。

共同セミナー参加者の一人として、私どもにすばらしい体験を与えて下さった飯田先生始め多くの善意の方々に心から感謝申上げるとともに、今後益々のご発展をお祈りいたします。私ども卒業生もその名に恥じないように頑張りますので、後輩の皆さんも、続いてきて下さい。

上智大学助教授
長島正

私が大学共同セミナーに参加させていただいたことによって、結局は大学生活の中での自分自身のとらえ方を学んだのです。大学生活という精神的失業のような状況の中で、一つの渇きをおぼえていたときに、自分のライフ・スタイルのようなものを考えていく、自己選択に決定的な影響を与えられたのであります。

ここでうけた衝撃というものは、思想というよりも、その思想を生きている人間に現実にふれたことが、事実として迫ってきたことでありました。

飯田先生を初めてお見受けした時この近辺にお住まいのおじさんという印象でしたが、お話を聞いていきますと、何かぐんぐん胸に響いてくるものがあり、これは大変な人だという実感を持ちました。どうも飯田先生という方は、理想とか思想を食べてしまって、それを生きている方であり、私にとって、自分を見つめていくというところで、大きなchallengeであり、supportであることを実感します。また、共同セミナーで指導をしていただいた先生方の中で、例えば哲学者の信太正三先生や歴史学者の堀米庸三先生は、思想家としての先生であられますが、私にとっては、その思想を生きておられる人間との出会いが一番の収穫であったと思います。

一つのともしびをともすには、必ず燭台があるわけですが、燭台の形でかかわってこられた家族の方々や職員の方々、それを支える周辺の人びとに、かつての共同セミナー参加者としてお礼を申上げたい。そして、この八王子の丘だけを聖化するのではなくて、ここを下っていった自分自身の生き方の中でその経験をどう生かしていくかが大切だと思います。

学生のときには、ここには大学にないものが得られるという印象が強かったが、何回かかわっていくうちに、大学にないものをここに求めるのは、一つのエスケープではないかと考えるようになりました。大学にないものを創造することは大切ではあるが、創造する過程において自分なりに吸収したものを自身の日常性、キャンパスでの自分とどう統合していくのかが重要だと思います。

通産省繊維高分子材料研究所員
安宅光雄

私が大学に入学した時に、時を同じうしてこのセミナー・ハウス

が開館し、第八回の共同セミナーから大学時代ずっと出させていただいたので、名実ともに卒業生であると思います。私がここに来るたびに不思議に思うことは、今まで気がつかなかった匂いに気づくように、鼻がよくなっていくことです。人の匂い、物の匂い、そして朝ここで目をさますと鳥の声が聞こえる、夜散歩すると裸電球のないところの道が暗いというようなことも感じさせてくれる。街の生活では感じられなかった匂いや音とか明暗などを感じさせてくれる。ここに来ることによって、今まで知らなかった人とか世界を知ることができ、今までそこにあるのに知らずにきた世界を知ることができる。また、かつて考えていたけれども、日常の生活の中で見失っていたものを再発見することができる。私にとって、セミナー・ハウスとはそういう場所でありました。

私が一ケタのときから出た共同セミナーが、多くの人びとの共同作業で、ここに一〇〇回となったことは、人ごとでなくうれしいことであります。

挨拶と感謝

セミナー・ハウスを育てた共同セミナー

館長　飯田宗一郎

日本の大学教育が直面している障害は多い。その障害を克服する一つの試みが共同セミナーであった。セミナー・ハウスはその発想の当初において、単に各大学のゼミナールに場所を提供するばかりでなく、独自の教育プログラムを創案し、その自主性を世に問うことを目的とした。その自主性を見事に発揮したのが、いま皆様と歓びを共にしている共同セミナーであるといっても過言ではあるまい。狭い領域内で従前どおりの講義をしていたのでは、到底切り抜けられる状況ではないという大学教育の現実をうけとめた上で、考案されたのが共同セミナーであった。

幸いにも多くの教授達と学者達が、大学社会の一員として、同じ関心を持ち、問題を頒ち合う用意があったため、共同セミナーは順調な歩みをつづけ、一三年にして一〇〇回を重ねることができた。それにしても、いまもなお眼前に浮かぶのは、初代館長の茅誠司、初代企画委員長の手塚富雄、第一回共同セミナー運営委員長の永井道雄の三先生と共に想を練った一四年前の光景である。迫真の気概があったればこそ、共同セミナーは雄々しく船出することができたのである。

お手元に差上げた「共同セミナー一〇〇回の歩み」はわずか七二頁の冊子であるが、指導教授と学生達が討論し、興奮して体現した共同セミナーの記録である。

私はこの会場において、共同セミナー一〇〇回の歩みをあかしすることができるのを誇りとします。いまここに多数の卒業生が、大学助教授として、研究所員として、会社員として、公務員として、また家庭婦人として出席されているからである。さらに、過日国際交流基金賞をうけられたアジア財団のスチュアート氏夫妻と、古稀を迎えられた一橋大学名誉教授板垣與一先生も共同セミナー参加経験者として同席されているからである。そして日本学術会議会長伏見康治博士を始め第一〇〇回記念共同セミナー参加の教授・学生が堂を満たしているからである。私が大学セミナー・ハウスを、あえて The Seminar House と呼ぶ理由は、他に例をみないユニークな教育プログラムとしての共同セミナーが存在するからである。

共同セミナーの未来は、必ずしも一〇〇回の歩みの延長線ではあるまい。しかしながらその歩みはひきつづき継続し、多摩の丘を真理愛の拠点に育ててくれるよう祈らざるを得ない。求めて得ざることはあっても、求めずして得ることはないのだから、世代の交替はあっても、セミナー・ハウスの進路は変わることはあるまい。

終りに共同セミナー一〇〇回の歩みというこの栄誉を共にお祝い下さった皆様のご協力とご厚情に心から感謝してご挨拶とします。

（1ページよりつづく）

研究所の中にある放射光研究所もその一つであり、未開拓の研究分野から非常に大きな期待が寄せられている。

しかし、このように個々の科学に必要な施設を作ることだけが学術会議の仕事ではなく、科学者社会の中核体にふさわしい仕事をしなければならないのは当然のことである。学術会議の初期段階のスローガンは〝科学のための科学〟であった。これは主として原子爆弾に対するリアクションとして、基礎科学に閉じこもれ、という気持が多くの科学者の中にあったからである。高度成長期には〝役に立つ科学〟ということが言われ出した。第二期の主要なスローガンである。そしてご承知のように高度成長期の結果、公害が露呈して〝人間のための科学〟へと変わってきた。公害を原点とする反省期である。

このように時代とともにものの考え方が変化するのは当然としても、残念なことには、学術会議が世界の新しい動きを予見して手を打つのではなく、常に後手に廻ってしまっている。公害についても問題の最も深刻な部分には手を触れていないのが実情である。一例として、科学技術庁の委託を受けて、民間の研究会社が分析したところの、原子力潜水艦による海水の汚染状態に関するデータがねつ造されていたという事件があったが、学術会議は何も対応することができなかった。その理由は、そこに働いている者は科学者ではない、と言い切ってしまったからである。とするならば、会社で分析業務に従事する者は、すべて科学者でなくなる恐れがある。また、水俣の問題にしても、窒素の会社で働いている科学者が、水俣病の原因が水銀であることを全然知らなかったということはあり得ない。社会的圧迫に屈する者は科学者ではないと言い切れるほど、学術会議の会員は確固たる信念を持つ存在であるのだろうか。要は、会社の中にいる科学者は、個人としてきわめて弱い立場に置かれているということである。あのガリレイでさえ、宗教裁判にかけられると、表面的には地球は動かないと言い、裏でそれでも地球は動いていると言った。われわれは個々の科学者としてではなく、科学者社会という集団としてはじめて真理を強く語ることができるのであり、そのために、活動の指針となるような基本的原則を明文化した科学者綱領なり科学者憲章が必要である。そのための努力が学術会議でなされているが、同時に、科学者社会の一つの形態としてわれわれが考えている学会には、不文律としての憲章がある。他人の論文を盗用するということは学者の道徳に反する。これも科学者綱領の一つであるし、科学的真理を語らずして偽りを語る科学者は、科学者社会から放逐されねばならないだろう。このような制度が確立されるまでには、実はまだまだ長い時間が必要であり、われわれは歴史の中での経験を積み重ねていかねばならない。

（第一〇〇回記念大学共同セミナーの主題講演より。文責・編集者）

第100回記念大学共同セミナー

主題――21世紀に向かって

――学問と人間の問題――

期日――昭和53年10月7～10日

〈主題講演とシンポジウム〉

Ⅰ 科学と社会――科学者社会の形成に向かって――
日本学術会議会長　伏見康治氏

Ⅱ 国際関係の政治経済学
一橋大学名誉教授　板垣與一氏

Ⅲ 文学にとっての未来
東京大学教授　佐伯彰一氏

Ⅳ 物質から人間へ
慶応義塾大学教授　渡辺　格氏

〈シンポジウムとセクション演習〉

Ⅰa 発展途上国への技術協力――ヒマラヤの山村を中心に――
筑波大学教授　山田圭一氏

Ⅰb 科学者の倫理――Scientific Communityの可能性――
神戸商船大学教授　坂本賢三氏

Ⅱa 資源ナショナリズムと多国籍企業
一橋大学名誉教授　板垣與一氏

Ⅱb 第三世界の経済開発と環境問題――経済学のパラダイムの転換を求めて――
高崎経済大学教授　高瀬　浄氏

Ⅲa 未来へ向かっての言語と批評
東京大学教授　由良君美氏

Ⅲb 文学――自我と文明――
お茶の水女子大学教授　野島秀勝氏

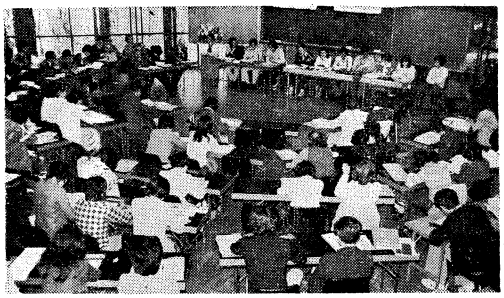
Ⅳa 分子生物学と社会
東京大学助教授　溝渕　潔氏

Ⅳb ライフサイエンスの産み出す社会的問題――遺伝操作のもたらすもの――
三菱化成生命科学研究所社会生命科学研究室室長　中村桂子氏

〈運営委員〉

聖心女子大学教授　岡　宏子氏
東京大学教授　野田春彦氏
東京経済大学教授　荒川幾男氏

〈参加学生〉 120名（内女子51名）
早大(15)、東大、高崎経済大(14)、慶大(8)、津田塾大(7)、東外大、東工大(5)、お茶の水女大、ICU、聖心女大(4)、一橋大、筑波大(3)、独協大、青学大、共立薬大、上智大、日女大、明学大、立教大(2)、東京医歯大、東京学芸大、農工大、電通大、群馬大、横浜市立大、大妻女大、駒沢大、成蹊大、成城大、東女大、中大、日大、明大、鶴見大、実践女大、白百合女大、同志社大、同志社女大、東京経済短大(各1)
計三九校



最終日の全体会――各セクションの報告

◇

昭和40年7月、当ハウス開館と同時に、日本の大学を開く新しい試みとしてスタートした大学共同セミナーは、一三年を経て、53年10月には第一〇〇回を迎えることになった。この記念すべきセミナーは、共同セミナー委員会が二年がかりで構想を練り上げ、岡、野田、荒川の正副委員長が運営を担当されて実現したものである。

◇

20世紀は科学技術の飛躍的な進展をもたらしたが、一方では人類の生存をかける状況を孕みつつ、21世紀への道を模索している。われわれ人類は、学問の意味とその社会的責任を改めて問い直すと同時に、人間のあり方そのものをも捉え直さねばならない。「21世紀に向かって――学問と人間の問題」をテーマに設定した所以である。この大きなテーマにアプローチするため、従来の共同セミナーにはない、講演とシンポジウムを中心とする形式がとり入れられた。柱となる四つの主題講演が自然、社会、人文の諸分野から立てられ、それぞれにシンポジウムを配して議論を展開するという構想である。さらに言えば、主題講演では、四人の先生方が一分野の専門家としての立場から問題提起を行い、第一〇〇回セミナーのために特別に企画された記念シンポジウム（内容は7頁に別掲）では、これらの先生方が一堂に会して、専門をふまえた上で優れた学者として、また一個の人間として発言される、というふうに、二重三重に大テーマへ近づく手がかりが張りめぐらされている。

◇

セミナーはまず、伏見康治氏による主題講演Ⅰで開始された（要旨は1頁参照）。

二日目は、午後の一〇〇回記念プログラムをはさんで、板垣與一氏と佐伯彰一氏の主題講演ⅠとⅡが行われた。板垣氏は、現代における危機意識を第一に資源開発による成長の限界、つまり人間と自然との間の危機、第二に南北問題に示される危機としてとらえ、実はこれらの二つの危機は一つの危機の二つの側面であることを指摘された。近代化とは、政治・経済・社会・文化の四つの側面において完成しようとする一つの思想と行動、理念と運動の総体であることを18世紀から歴史的に後づけ、南北問題が歴史的発展パターンの落し子であり、そのメカニズムは政治経済の論理（諸科学）で解明できるが、それをどのように社会・文化に対応できるように再編成するか、つまり新しい国際秩序の論理と倫理が求められていることを明らかにされた。

佐伯氏は、次の五点について問題提起をされた。第一は、文学は本質的に過去にこだわる習性を持つので、未来を考える時に、文学的想像力はいかにして過去と未来との間をドラマタイズできるかを問うことはきわめて重要である。第二は、19世紀を支えていた合理的大人、良識ある市民に対して、フロイトの人間の内なる幼児の発見により、20世紀には文学観、人間観が大きな変化をとげた。第三は、文化人類学の発展により、未開と文明といった文化的ヒエラルキーが崩壊し、文化はそれ自体の構造を持つことが明らかとなり、ヨーロッパ中心の世界像から著しく視野が拡大した。第四は、技術革新により大量生産（消費）がもたらされ、オリジナルと複製の区別が困難となり、ethnic cultureがきわめて重要な意味を持ってきた。そして最後に、文学研究の未来に言及され、二つの方向――個別主義と普遍主義――の往復運動こそ、ヨーロッパと中国の文学を研究している日本に有利であり、文学研究の未来にかかわる一つの鍵であると結ばれた。

三日目に行われた主題講演Ⅳで渡辺格氏は、従来、バクテリヤやウィールスを対象としてきた生物学は、分子生物学の発展により、生命科学として人間の生命、脳から精神の問題をも抱え込むに至っている状況を概括され、今後の課題として次の諸点を強調された。

①生物が物質機械であるという時、遺伝現象を基盤にしているが、それは地球上の生物の生命現象にのみ適応できる。つまり地球型生物のメカニズム――DNAに刻み込まれている遺伝暗号は、どの生物にも共通していること、DNAによって同一性の保持が行われることなど――は物理科学的に解明できるが、われわれは生命現象に関する一般的概念をまだ持たないので、物理学の世界から生命

を演繹することはできない。②生命科学が人間の問題、とくに脳や遺伝の問題に肉薄するにつれて科学と社会との対立が深刻さを増してきているが、科学の暴走を社会が規制するという側面ばかりでなく、社会に問題があるので科学が自重を迫られるという面もある。③人間の生得的なものと考えられている精神も、社会的環境で獲得するものであることを、人間の代用となる高等動物の行動研究によって実証できようが、そのためにはコミュニケーションの技術を発展させることが必要である。さらに地球外生物とのコミュニケーションが成立するためには、われわれ人間のロジックが普遍性を持つかどうかが前提となるので、最終的には精神の問題を超えてロジックの問題となるであろう。

◇

以上の主題講演とそれに続くシンポジウムによって、学問の諸領域における問題点はすべて出しつくされた。おそらく参加学生の大半は消化不良のまま最終日を迎えたことだろう。また、プログラムの面でも、共通方向に議論を集約させることをせずに自由に討論ができる機会として運営委員が意図した三日目夜の全体討議は、自分の思いを個別に話し合いたいという学生たちの要望によってセクション演習に切りかえられ、またあるセクションは二つに分裂するなど予期せぬ変更が生じたが、学生一人一人が、現代があらゆる意味で危機意識に根ざした転換期であることを共通に認識して、丘を下ったことは間違いない。21世紀は確実にかれらの時代である。

一〇〇回記念セミナーは、こうしてそれにふさわしいテーマの下に開催され、一〇〇回という歴史を刻んだが、とりわけセミナーの柱となった伏見、板垣、佐伯、渡辺の四人の先生方が、当ハウスとの深いご縁と友誼の中で、快くこの企画に応じて下さったことを、大学共同セミナーの歴史に永く記憶しておかねばならない。

○「自我」の組みかえの契機

東田　年弘

独り言、二人の会話、数人での議論、百余人の集会。話者は同一でありながらそれを取り巻く状況は皆違ってくる。この四日間は、日常、無意識のうちに繰り返す「おしゃべり」や「対話」についての再検討をいやがおうにも迫るものであった。

それは話術のTPOから、今、より根本的なレベルでの反省を促してきている。本来、シラケるとは、対話のベクトルが内向化する状況と見合っている。私もそのうちの一人なのかもしれない。だから、「学生だけのテーマなき全体集会」を多数でもって拒否したのは理屈というよりは心情だったように思える。このことは、例えば「クラスコンパ」や「〇〇会」などを通じて体験的に知っている。そこでは、どちらかというと「既に知りあっているもの同士」が一カ所に集まるという傾向にあるのではなかろうか。未知なるモノに接し、「知らない人」と話をすることそれ自体に意義があるとは思わない。やはり異質なものよりも同質のものへと向かいがちだし、仲間の方が安心するだろう。人間にとって心情的同一化は抗いがたい誘惑である。

しかし他方で、「異質なもの同士」と認め合う、あるいは認め合えるところに初めて生まれる「つきあい」のあることも、また常識的に知っている。たとえささやかな、そして他人からすれば拙い知識や体験であっても、確実に自己の内側にキープされていくものがある。それを新たなるものや人と人との連なりの中でかみ合わせ、遺伝子ならぬ「自我」の組みかえの契機とするプロセスを欠いてきたことへの反省が、今ある。その結果は、いわば知識の消化不良と体験の動脈硬化。このように「学問」する場面にとどまらない私的レベルの問い直しは「学際」に参加した時、やはりはっきりした。それは、柵ごしの「転換期」確認作業を踏みこえ、共有した各分野相互間の「接点」から、再度、個別領域をトータルなイメージで練り直す「場」の設営への可能性であった。

しかし、そのことは何よりもこの視座を所与としてではなく、課題として絶えず日常の中にはりめぐらしていくことになるだろう。今回の収穫はその必要性を確認したことにある。

（中央大学法学部4年）

大学共同セミナー100回記念シンポジウム

主題――21世紀に向かって

――学問と人間の問題――

＜司会者＞

聖心女子大学教授
共同セミナー委員会委員長　岡　宏子氏

＜発題者＞

日本学術会議会長　伏見　康治氏
一橋大学名誉教授　板垣　與一氏
東京大学教授　佐伯　彰一氏
慶応義塾大学教授　渡辺　格氏

◇

第一〇〇回の記念すべき大学共同セミナーに際して企画されたこの記念シンポジウムは、ちょうど一〇〇回という区切りの時に、変動と発展の20世紀から次の世紀に向かって科学や技術の進展による成果を人間はどう考え、どう対処していくかをさぐろうとしたものである。20世紀における学問、技術の進展の所産は、人の住む自然、環境を大きく変貌させただけでなく、人の生活、運命にも一つの偏向を与え、人間の精神活動にも、社会・国家の力動的な力関係にも、大きな変動を与えている。科学と社会、国際関係、文学、生命科学の各領域の碩学が一堂に会してもたれたこのシンポジウムは、いわば第一〇〇回大学共同セミナーのハイライトであった。

会場は、記念の集いに引き続いて出席された来賓を加え、二百人の聴衆でうずまった。折りからNHKのテレビ番組「スタジオ一〇二」の取材で、シンポジウム風景が撮影されたこともあって、一種の熱気と緊張感が漂った。

四氏とも、ご自分の専門分野における主張は、それぞれの基調講演においてなされた関係もあり（概要は6頁の共同セミナーの項を参照）、むしろ一学者として、21世紀に向かって人間の行動を予測するところに論点をしぼって語られた。

①……**伏見康治氏**

終戦までは「科学のための科学」の立場に属していたが、広島・長崎の原爆によって、もう少し世の中と接触する科学をやらなければならないことを痛感するようになった。

その最も大切な接触点がエネルギー問題であると考え、非核物理学の立場から、原子力の中にその将来を求めた。日本における原子力研究を茅誠司先生とともに提唱したが、時期尚早で四面楚歌のかたちとなった。その直後、アイゼンハワーのAtoms for Peaceという演説により、日本にもその動きが始まり、またたく間に原子核学者を飛びこえて産業界の問題となった。そこで私は核分裂のエネルギーの次に来るべきものとして核隔合に手をつけ、名古屋大学にプラズマ研究所を作り、一二年間所長として基礎研究を行った。

当初、低迷状態であった研究もようやく現実に近づく徴候が見え

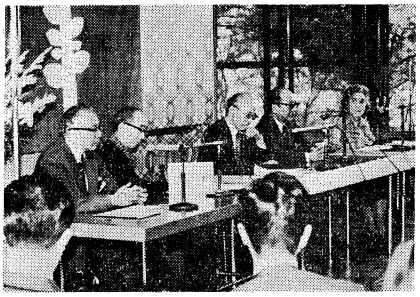
始め、オイルショックを契機にエネルギー問題を根本的に考え直そうという国民的基盤の高まりで上向きになってきたが、このような状況になると、「役に立つ科学」から、どのように人間の生活に調和させていくかという、「人間のための科学」の段階に来ていることを真剣に考えている。

②……板垣與一氏

主題講演で南北問題を語りながら、絶えず頭を去来していたのは、「価値」と「意義」の問題であった。「成長と福祉」「効率と公平」ということは、interdependence（相関的緊張）という形で、お互いに離れられない二組の概念であり、ウェーバーの言葉を使えば「相関と緊張」という関係で「AND Structure」（〝と〟の構造）が出来ている。

伏見先生の言われた学術会議のスローガンについて言えば、「科学のための科学」とは、人間にとって無目的、科学それ自体であり、「役に立つ科学」という場合には価値の原理となり、さらに「人間のための科学」という時には、意味の問題が入ってくる。

19世紀的価値の哲学から、20世紀の後半において意義の哲学へと進んだ思考の深まりがあったが、この場合の価値と意義とは、哲学史の上で分けているのであって、19世紀のドイツ哲学を中心に言えば、価値哲学的意味をもつものである。そして、我々が何か問題を考える場合に、全体をつかむのは「意味」の問題であり、全体対部分の認識は「意義」である。全体と部分の関連が常にある。この場合の部分が「価値」の問題である。今日の世界の問題は、全体の意味の関係で部分の価値を絶えず認識し、反省している筈であるが、部分がしばしば全体から離れて自己運動を始めるという危機に直面しているところにある。21世紀に向かって、意味と価値、意味と意義の関係において、互いに切り離して一方を考えるのではなく、相関的緊張の中で考え、行動する必要がある。



記念シンポジウム：左から渡辺，佐伯，板垣，伏見，岡の諸氏

③……佐伯彰一氏

ただいまの両先生の言われた科学の三段階を、文学に適応しようとすると、ちょうど逆のかたちになるように思う。日本で古事記が伝承されたり、また聖書にあるような物語が寓話のかたちで語られたり、ギリシャ悲劇が語られていた時期は、まぎれもなく「人間のため」として文学は生きていた。そして宗教や道徳、政治のためというふうに目的意識をもった文学が次に強調されるようになるが、それでは文学そのもの、芸術そのものの価値がしばられ、やせ細っていくばかりである。そこで19世紀の後半から20世紀にかけてのヨーロッパでは、文学とか芸術というものは、ある目的意識とか外的価値から解放されて、文学のための文学、芸術のための芸術であるべきだという主張がするどく強調された。しかし、ここに至ってやっかいな問題が生じている。文学は科学と異なり〝持ちがいい〟ことが大切である。シェイクスピアは絶対、他のものにとってかわれない。ところが、テクノロジーの発達によって、使い捨て文化が出現し、文学そのものが持っていた、持続的価値と情緒的快さが荒らされ、他の手っ取り早い方法でそれに類するものを味わうことが可能になってきた。

そういう意味で、本来的な文学の意味や価値をもう一度はっきりつかみなおす時がきている。さもないと使い捨ての文学となって消えゆく運命にあるかも知れない。

④……渡辺　格氏

21世紀に向かって一番大きな問題となるのは、人口問題であると思う。人口が増加するのであれば、淘汰しなければならない。しかし、そのやり方が問題である。そこに大きな価値の問題が入ってくる。

戦後、私が物理科学の世界から生命という問題に飛び込んだ当時は、役に立つとは思わなかったが、遺伝子の組み換え、その一つの例として窒素固定、それによる食糧問題ということにまで関係することになると、生命科学が極めて人間生活に役に立つものになってしまった。しかも生命科学は生命のコントロールが出来るようになる。その成果が人口淘汰に使われる可能性がきわめて大きい。

「人間のため」という時に、一体、誰のためのものなのか。自然科学者は、自分のやっていることの限界を認めているが、社会科学者や人文科学者はその辺を指導してくれていないのが実情である。

×××

五分間に限った四氏の発題のあと、もう一廻り各々の発言の機会が与えられ、相互の議論に移った。以下は、展開された論点のあらましである。

○科学に関する三段階の考え方は戦前戦後の科学技術に関するものであって、元来、学問というものは必要性、実用性から生まれてきたのであり、科学のための科学という概念は比較的新しい。時代により、学問の分野により、歴史的変遷は様々で、いつも同じパターンで繰り返されるものではない。「科学のための科学」という概念が成立してから科学は発達したのであって、役に立つ科学、人間のための科学ということを言っている時でも、「科学のための科学」という考え方がなくなるわけではない。

○学問の純粋性は学者間で認識していても、産業界その他で実用化してしまうという傾向と、人間のためといわなければとんでもないものを作りだす危険があるのではないか。

○科学が鬼ッ子を作りだしたのではなく、科学が生み出したものを正当に評価できない幼稚な頭脳が問題である。全体の人間のレベルが、科学の発展のレベルに追いついていないのではないか。

○厳密性を尊ぶのが自然科学であり、厳粛性を尊ぶのが社会科学・人間科学であるが、知識と知恵の世界に焦点をあてて、意味の問題を重要視するがゆえにこそ、人間科学・社会科学は苦しんでいる。

○人間が生き残れるかどうか、という場合のポイントは、技術の発展により先天性異常、遺伝障害を淘汰する、ということになって、円満な人格者だけが残れるようになる。つまり、正常な人間でも平均的に劣性遺伝子を五、六は持っているわけで、それをも淘汰してしまおうとする。

○人格の悪い人間は淘汰されるという基準で古来の作家、芸術家、詩人をみると、淘汰されない者はいないだろう。ドストエフスキーは癲癇で、ジャン・ジュネはホモで泥棒もやった。つまり適応の問題である。あまり適応を言い過ぎると息苦しくなる。遊びの余裕があって文学がなくならない限り、淘汰は起こらないのではないか。

○人口ゼロ成長の世界を想像することは、サイエンティフィック・フィクションを考えなくても可能ではないか。現に徳川時代は、三〇〇年間、人口が増加していない。当時は、生まれた赤ん坊を殺し、お地蔵さんを作ることで精神的慰安を求める、という解決をしてきたが、地球全体にも当てはまるのではないか。

○南北問題では、人口問題は発展途上国を圧迫するための先進国のエゴイズムというかたちで現われる。われわれは真剣に人口政策を

たてるべきではないか。
○日本は多産多死、多産少死、少産少死の三段階を経てきている。しかし、なぜ多産多死でなくて少産少死がよいのか、という問題が残る。
○人口も停滞し、鎖国状態で全体が生きのびた江戸時代の秘密を探ってみると、哲学の点では、死を受け入れる態度が行きわたっていたと見るべきではないか。
○悪用されかねないので、きわめて慎重に述べるが、今まで生きることばかりを考えてきた生命科学も、いかにうまく死ぬか、ということを考えねばならない段階にきていると思う。

●……岡　宏子氏

このシンポジウムをどうまとめるかは、皆さんの心の中の問題です。科学・技術の発達は、エネルギーでも何でも、すべて人工的にしたが、それが人間の知恵であるならば、人工的にしたものを私どもの危機に結びつけないでどうやっていくかということも人間の知恵であります。どう生きるかということと、どう死ぬかということも含めて、我々20世紀の人間が問題として論じたことを、21世紀に向かっている皆さんは心の中に置いていただいて、そこから出発して、皆さんの思考と行動を展開していただきたいと思います。

記念パーティ（食堂）：右から小谷，渡辺，野田，板垣の諸氏

マスコミの視点から　共同セミナーを捉える

大学共同セミナー一〇〇回の歩みの意義は大きかった。創立十周年記念以上の反響があった。狭いわくぐみの中に閉じこめられている日本の「大学を開く」さきがけとなった大学共同セミナーの成果をマスコミの目が捉えてニュースとしたわけである。

以下は、取り上げられた記事見出し及び番組名である。

○読売新聞「編集手帳」（53・10・4）
○朝日新聞（53・10・5）「百回を迎える大学共同セミナー」
○サンケイ新聞（53・10・7）「心の触れ合い／もう一〇〇回／多摩の大学共同セミナー」
○東京新聞（53・10・8）「百回迎えた共同セミナー／『豊かな人生』学ぶ」
○NHKテレビ「スタジオ102」（53・10・9）「インタビュー　飯田宗一郎」
○NHKラジオ第一放送「ニュースレポート」（53・10・11）「ルポ・百回を迎えた大学共同セミナー」
○朝日新聞「不連続線」（53・10・17）「もうひとつの大学」
○日本経済新聞「ニュース・チャンネル」（53・10・23）「〝開かれた大学〟セミナー百回／考える喜び知る」
○サンケイ新聞「文化」（53・11・9）「大学教育の裏方さん（岡宏子）」
○世界日報「ぼうえんきょう」（53・11・17）「セミナー・ハウスの歩み」

×　×　×

セミナー・ハウスの理念を現実化した功労者は国公私立大学のボランティア教授達と学者達である。飯田館長の胸にジーンとひびいて来るのは、「川を渡って木立の中へ」ということばであるという。幾度か壁にぶつかったであろう。読売新聞の編集手帳をここに紹介し、ニュースレポートを再現して、一〇〇回の歩みを土台にすえてひきつづき継続する共同セミナーの多幸を祈りたい。

●読売新聞「編集手帳」（10月4日〈水〉）

東京・多摩丘陵の大学セミナー・ハウスの大学共同セミナーが一〇〇回目を迎える。七日から「二十一世紀に向かって」をテーマに行われる第一〇〇回セミナーでは、記念パーティーや記念シンポジウムも予定されている◆あのセミナー・ハウスなら、学生のころ利用させてもらったと懐かしがる方は、全国各地においでだろう。さる四十年七月の開館以来、利用者はのべ五十万人にも及んでいる。同ハウスの誕生のきっかけは、そのさらに六年前、現館長の飯田宗一郎氏が、大学のあり方はこれでいいのかと考えたことだったという話は有名だ◆東京女子大や国際基督教大に在職した経験から生まれた、マスプロでなく、心と心の触れ合う人間教育の場がほしい、豊かな自然の環境の中で、教授と学生の小グループが起居を共にし、人格的に接触する場を作りたいという願いは、国立と私立が一緒にやれるわけはないといわれながらも結実した◆以来十三年、開館早々は、便所に行く階段も電灯もなく、関係者が大あわてした一幕もあったというが、さる六月には、国際セミナー館も増設された。大学生活の中で印象的だったのは、このハウスでの数日間です、「生活は簡素に、思想は高潔に」という食堂の文字が忘れられませんといった感想も数多く寄せられている◆そうして、同館の行事の中でも中心的なものが「開かれた大学」を目指す大学共同セミナーだ。第一回のテーマは「世界の中の日本」。以来さまざまなテーマがとり上げられているが、その最大の特徴は専攻分野や国公私立の壁を破り、講師も参加学生も北海道から九州まで全国から集まり、ぶつかり合っていることだ◆これまで九十九回の大学共同セミナーの講師はのべ八百三十人、参加学生は八千三百人。名実ともに「第三の大学」だ。同ハウスでは八日正午からの記念パーティー、シンポジウムには、すでに社会人になったこれら参加学生にできれば全員出席してもらい、語り合ってもらう計画だともいう。

●ニュースレポート（NHKラジオ第一放送）から（10月11日）

――初めての参加ですか。

――はい、そうです。このセミナーの委員をしておられる大学の先生から教えていただきました。とにかく、いろいろな他の大学の先生や学生と交流ができるということがとてもうれしいのです。

（日本女子大学・生物学専攻）

――僕はもう七回目なのです。科学と社会との関係に興味を持っており、それに対していろいろ貴重なインフォメーションを与えてくれるようなセミナーがたくさんここにはあるので、そういうセミナーが開催されるたびに来ていたら、こんな回数になりました。

僕の場合は、医学部という極度に専門化した分野ですから、むしろ自分の学問、医学というものを社会の中で、あるいは他の学問との間で位置づけたい、という気持があり、いわゆる大学で自分のやっていることの周りを固めているというふうな感覚で、僕は参加しています。（慶応義塾大学・大学院生）

お茶の会――共同セミナーのOBたちも家族をつれて（交友館）

●事業部だより

●10・11月の利用状況

10月はゼミ回数九七、宿泊延人数三、八九四人、11月はゼミ回数九一、宿泊延人数四、一八八人となっている。

●学会・研究集会で賑わう

例年秋は学会、研究集会のシーズン。10・11両月、各大学のゼミ利用に混って開催された主な集会は――電気学会セミナー、日本経営工学会、日本小児神経学セミナー、順天堂大・病院業務改善セミナー、核融合理論研究集会、天体物理学研究会、放電研究グループ若手セミナー、地域構造研究会などで、利用回数も一〇回を超え、秋の常連となったグループが少なくない。

順天堂大・病院業務改善セミナーは、当ハウスの利用一〇回目を記念して、10月14日交友館で記念夕食パーティを開催、有山登順天堂理事長他同セミナーの参加者一二〇名全員が参加した。また、核融合理論研究集会は、今年は10月23日から11月4日まで、実に一三日間にわたる長期滞在であった。全国各地の大学・原子力研究所等の研究者約七〇名の宿舎には、主として国際セミナー館・長期研修館の一角が当てられたが、昨年までには得られなかった居住性と便宜が好評であった。なお、この両館を有機的にあわせての利用は、特に五〇～六〇人程度の学会・国際会議等の開催に好適で、是非試みられるようお勧めしたい。

●宿泊者数延五〇万人に達す

10月20日、開館以来の宿泊者延人数が五〇万人に達した。昭和40年7月5日、当ハウスは開館を記念する第一回大学共同セミナー「世界の中の日本」（運営委員長・永井道雄東工大教授、参加学生一〇三名）の開催をもってスタートしたが、これはそれより数えて一三年三ヵ月一五日目に達成された記録である。

国公私立大学の共同体への〝参加〟の証しとも云えるこの記録――三〇万人は開館九年目の昭和49年6月に、四〇万人は二年前の51年9月に、それぞれ達成されている。記念すべき五〇万人台への到達はいつになるか――この9月末日には四九万七、四二二人に達し、あと二、五七八人と迫ったので、10月も中旬を過ぎる頃から、フロントでは連日宿泊者数の累計を見まもることになった。そして、20日の夕刻に入館した東海大・師岡孝次ゼミ（一九名）で、ついに五〇万人目を数えた。

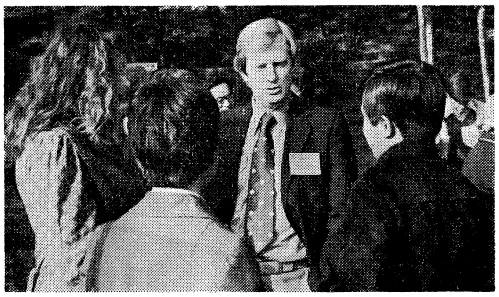
当日は夜九時のお茶の時間、交友館に師岡ゼミ、東大・渡辺昭夫ゼミ、法大・石見徹ゼミの計四一名が集合、勉強の合間にささやかな祝賀会を催した。館長あいさつの後、師岡教授の当ハウスに対する愛情のこもったお言葉と音頭により全員が乾杯、この記録の意味に思いをよせながら、しばし交歓のひとときを過ごした。なお、参会者に館より心ばかりの記念品が贈られた。

50万人の達成を祝う夜の交歓会（交友館）

●共同セミナーから生まれた研究会など

この秋開催された諸集会のなかには、大学共同セミナーや国際学生セミナー等への参加が機縁となって生まれた研究グループがあり、当ハウスと関係の深い指導教授や学生が再びこの丘での〝リユニオン〟を喜ぶ姿に接することが出来た。「科学研究会」は第94回共同セミナー「自然科学とキリスト教」で東大助教授・村上陽一郎氏が指導されたCセクションの〝ポスト・ゼミ〟である。「水曜会」は広野良吉成蹊大教授を中心とする社会人・大学院生の経済学研究グループで、これには当ハウスの国際プログラムに参加した学生も熱心なメンバーとなっている。

今年第三回目を迎え、秋の定例行事となった日豪学術文化センター主催の日豪合同セミナー（11月18・19日）は、当ハウス主催の国際学生セミナーに参加した豪州の留学生が中心となって昭和49年に開催した第一回セミナーを継承するものである。その留学生の一人、当時東大の大学院で勉強中であったウォレン・リード氏が、今回のセミナーには駐日オーストラリア大使館の二等書記官として、元気な姿を見せてくれた。さて、今回のセミナーは「日本と豪州――人と生活――」をテーマとし、両国民の国民性と生活に焦点を合わせて、双方の考え方や在り方の相違を究明するとともに、到達可能な一致点を見出そうとするもので、駐日オーストラリア大使J・メナデュー氏、元駐豪日本大使甲斐文比古氏、都立大教授鈴木二郎氏、上智大客員教授G・クラーク氏など各方面から講演者が招かれている。豪州の留学生を含む外国人参加者も昨年より多い二六名を数え、また二三名にのぼる各界専門家・知識人を含めて参加者は計九四名（宿泊者七三名）――両国の友好関係を願う各方面の協力が結集されて、この合同セミナーは回を重ねるごとに充実して行くように見受けられる。なお、すでにおなじみとなった豪州のワインとチーズを添えての開会のパーティが、今年も紅葉の美しい野外ステージで行われ、また今回は、新設の国際セミナー館と交友館も両国参加者の交流を一層豊かにすることに役立つことができたようである。



日豪合同セミナー――オーストラリア大使を迎えて（野外劇場）

●キャンパス点描

【いも掘り大会】 10月15日午後テニスコート横のいも畑（本紙56・57号参照）で行われ、荒井良雄（学習院大）、飯泉信（日本電気）両氏とそのご家族、神保信一（明学大）氏のご家族など一〇数名が参加された。株単位と一個あたりの多収穫者には館長より〝賞品と賞状〟が授与された。また、たき火を囲んで焼いもを食するなど、レクリエーションと親睦の機会として喜ばれた。

【苗木の寄贈】 野田春彦・東京大教授（共同セミナー副委員長）が11月4日、れんぎょうとくちなしの苗木一〇数本を持参され、国際セミナー館前の池の周囲に植えられた。

【交歓会】 11月11日の週末の夕食事に八グループ二一二名が交歓。中嶋嶺雄東外大教授が滞豪一年の体験にもとづくスピーチ。東外大・東大・早大の連合グループ「コンツェルト」が練習中のロシア語劇「結婚式の日に」の一部を披露。日女大付属高七三名の合唱、全員の合唱と続いて盛会。

初めての本格的国際学会の利用

国際体育・スポーツ史東京セミナー

国際セミナー館の建設を契機に、同館を中心とする当ハウス全施設貸切りによる大規模な国際集会の利用も出始めてきた。その第一号は、9月25日から5日間にわたって開催された「国際体育・スポーツ史東京セミナー」(International Seminar of Physical Education and Sports History)である。この分野での各国の第一線級の研究者が一堂に会し、世界の体育・スポーツの歴史的研究の諸成果を発表・討論しようとするもので、わが国の体育史学会にとっても、この種の国際的学術交流の開催は、初めての試みといわれる。

このセミナーの計画はすでに二年程前から始められたが、同セミナーの当ハウスでの開催を当初より積極的に提唱されたのは、慶応大体育研究所の笹島恒輔教授(千人会員)であった。欧米ではこの種の学会は通常休暇期間中の大学で、学生の寄宿舎を使用して行われている。学問的雰囲気に加え、同一キャンパスで起居を共にすることによって人間的交わりを深めることが出来るからである。わが国では大学内に必ずしも同様の設備と環境が望めないので、ホテル等を会場とすることが多い。学会そのものの原点に帰ることを求めたとき、笹島教授は即座に当セミナー・ハウスを会場として思いつかれたという。

本年に入ってからは、実行委員長・今村嘉雄東京教育大名誉教授、事務局長・成田十次郎筑波大助教授と大学の枠を越えて構成された実行委員のメンバーが下見と打合わせに幾たびか来館、セミナー実施への入念な共同準備を進められた。当ハウスも、これら関係者の結集された熱意に応えて、主催者側にとっても、またそれを受け入れる当ハウスにとっても、ともに初めての体験であるこのセミナーを成功させるため、全面的な協力態勢でのぞむこととした。

諸外国からの参加者は一四ヵ国二七名、国内からは一二二名、計一四九名。うち大学教師は一一三名、社会人一二名、そして体育学専攻の学生・院生も二四名参加している。また、参加大学数では、諸外国一八大学、国内五三大学、計七一大学におよび、大学間交流の機会でもあった。セミナーは26日夜、食堂での歓迎レセプションに始まり、翌朝の開会式とそれに引続き行われた前記今村嘉雄教授による特別講演「世界の中の日本の体育・スポーツ」を皮切りに、三会場に分かれての報告と討論に入った。研究発表は諸外国二一、国内三〇で、今回のセミナーの主題「学校体育の成立・発展・改革とその歴史・社会的背景」、「スポーツ促進運動の過去と現在」をめぐって多岐にわたるものであった。

夕食後は、日本の伝統的芸能の紹介とレクリエーションを兼ねたプログラムが組まれた。特に二日目の夜の「日本の伝統的舞踊と音楽」、三日目の夜の「沖縄舞踊」では、いずれもその方面で一流の優れた演技者による熱演があり、国内・国外の全参加者に深い感銘を与えていた。この都心を離れた自然の中で、何とか諸外国からの友に通常国立劇場などでしか接することの出来ない第一級の伝統的芸能を楽しんでもらいたいという関係者の強い願いが見事に実現したものである。なお、当ハウスにはこれまで、それに相応しい舞台の用意がなかったが、これも施設関係職員の〝突貫作業〟で急きょ、しかし堅牢なステージが講堂に設営された。組立て式なので、今後同様の催し物に活用されることであろう。多摩の民家・遠来荘は大学茶道部の奉仕によるティーセレモニーの会場となった。国際セミナー館の事務・談話室は同セミナーの本部となり、また、展示室となった同館内のセミナー室では、幕末以降の日本と外国との交流を中心とした体育史の貴重な資料が公開された。交友館は休息と自由懇談の格好の場となり、コーヒーやビールを楽しむ内外の参加者の間に、いかにも自然な交流風景が繰り広げられていた。

かくして30日朝、当ハウスにおけるすべての日程は「無事、大成功裡に」(成田事務局長)終了したが、このセミナーの成功は、体育学関係者特有と思われる開放性、国際性、チームワークの良さなどと無関係ではなかったであろう。同時にこの丘の自然の中での「合宿」から深い人間的交流が生まれ、それが厳しい学問的議論を交わす上に不可欠とされる共通の基盤を創ることに寄与していたことは、参加者の感想文(別掲)からもうかがうことができる。前記の笹島慶大教授は会場選択の判断に間違いがなかったことを喜ばれた。そして、もしこれを都内のホテルで開催した場合を想定し、おそらく参加者は出入りする多くの利用客に混って、とかく自室に引きこもりがちとなり、また見物や映画などで街に出ることにもなって、静かな環境での共同生活から生まれるこのようなまとまりはとても望み得なかったであろうと指摘され、これについても海外の多くの参加者から高い評価が寄せられている旨伝えてこられた。特に〝全館貸切り〟としたため、施設を自由に活用でき、さらに食事、入浴、交友館の使用時間などもかなり流動的であり得たことも、「合宿」による交流の諸効果を一層高めることになった。

国際セミナー館を中心に全館を使用する本格的な学会、国際集会は今後も開催されて行くであろう。今回のセミナーを主催者側と共に〝初体験〟することによって、この種の大規模な国際会議を受け入れる際の心構えやポイントがわかり、自信が得られたこと、そして、世界に開かれたセミナー・ハウスとして今後施設面等で改善せねばならぬことは何か、など反省と検討を促される契機となったことも、当ハウスにとって貴重な収穫であった。

国際体育スポーツ史セミナーに参加して

宇都宮大学講師　阿部生雄

セミナーとかシンポジウムは、断絶された人間関係の上ではその機能を十分に発揮し得ないものだと思う。セミナーとは、苗床を意味するラテン語から派生した言葉で、苗を移植する場所を意味していた。種(学生)から成長した苗(研究者)を共通の土壌で育むこと、これがセミナーなのであろう。元来、優れた苗のみを選定して育てるセミナーも、今回は僕のような弱き苗を温く育む土壌を提供してくれたように思える。

一方、シンポジウムも、プラトンの「饗宴」が示すように、気の合う人との酒盛を意味していた。飲み、食べ、心を解放し、ゆったりと話し合うことから、研ぎすまされた議論を導くこと、これがシンポジウムなのだろう。こうした意味で、学問は温かな人間的交流の上での厳しい相互批判と議論によって育まれるといえよう。

今回、ISOPESH の「合宿」に参加し、日本や諸外国の体育・スポーツ史研究者と交流することによって、瞬時ではあれ、こうした共通の土壌と人間的な絆を垣間見ることができたということは、貴重な経験であったといえよう。大学セミナー・ハウスは、こうした学問の「合宿」にとって、格好の場を提供してくれたように思う。

◇現在会員は一、五四四名です

大学人　一、一七四名
社会人　三七〇名

◇新しく会員となられた方々

4名〔第45回報告（申込順）〕

B　一橋大学教授　西川　義朗殿
C　ユネスコ・アジア文化センター　青木美知子殿
A　広島大助教授　小林　文男殿
B　文部省学術国際局　篠沢　公平殿

◇会費ありがとうございます

昭和53年10～11月（敬称略）

高須裕三、黒田まゆみ、宮川透、伊藤隆吉、飯田経夫、島袋嘉昌、西川潤、伊能敬、相良惟一、宇都木章、近藤晃、伏見弘、椚国男、田端光美、久武雅夫、高橋泰蔵、子安美知子、岩内亮一、井上勝也、松田千鶴子、木村富夫、永澤越郎、小保方宇三郎、平野敬一、神田信夫、久場嬉子、山崎真秀、冲中重雄、東條秀光、青木美知子、長坂舜二、小倉安之、釜萢善一、重田信一、安達義明、神山妙子、青木俊一、大東百合子、矢吹晋、鈴木喬、町野朔、大村政男、平澤興、野口武徳、川原栄峰、北沢佐雄、佐々木克己、柴田愛子、佐藤康男、渡辺愈、末松安晴、松岡八郎、田村献、岡野行秀、石川静一、江尻美穂子、宇都栄子、小田中敏男、白井常、小川芳男、布川角左衛門、野田良之、田村恭、板垣興一、井門富二夫、日高精二、安達健、川村亮、松延博、松田稔子、大竹誠、筑波常治、井関利明、田中庄蔵、藤永保、久保良雄、戸塚元吉、鈴木順子、八木江里、矢内喜久子、石川吉右衛門、戸田盛和、小林善彦、岩浅武雄、島田徳三、藤岡通夫、貝塚爽平、満尾寿男、宮野彬、寺東寛治、小河原正巳、横田洋三、正路徹也、秋田成就、佐原六郎、森岡清美、山口喬、横山実、杉沢新一、坂野観司、今井淳、鈴木満、玉虫文一、高橋三郎、小田滋、鶴岡義一、辻キヨ、石川正一、藤村瞬一、佐藤方哉、牧内操、堀信一、武者小路公秀、山田芳孝、鹿島健次、大須賀政夫、加藤五六、渡辺礼子、冨子勝久、田島澄江、大坪秀二、福田隆義、清水護、小林澈郎、小野沢精一、大貫一、岩下秀男、竹村憲郎、森井真、内田章五、天利長三、飯田八千代、海老沢克之、藤村宏一、笹島恒輔、山本よしゑ、宮部菊男、外池正治、前田陽一、山本登、大友昌子、坂本清、坂口順治、太田時男、中岡和子、岸英朗、バッケス・ジャン、篠沢公平、田中外次、米満澄、小川捷之、宇野重昭、磯部浩一、山本大二郎、森田信義、高橋七五三、宇野義方、山口貞雄、小川利子、宮崎繁樹、渡辺仁、水野伝一、吉武泰水、山口清隆、中井虎一、永田清、中嶋嶺雄、飯田恵、和田恒代、衛藤瀋吉、吉沢英子、新田悟、伊藤成彦、伊藤玄三、馬場明男、弓削三男、岡島真理、温本孝、中尾由矩子、山崎典、斎川仁、木下是雄、阪田正三、大神田正儀、新井益太郎、今井哲哉、飯田芳男、石川明、増田義男、江副敏生、山科高康、高木仁、深沢宏、竹内与之助、飯野利夫、梶木隆一、小松八郎、相馬勝夫、松元文子、村井資長、飯田栄、田原虎次、山岸健、納富照枝、近藤保、松本樺太、森繁雄、谷重雄、江上不二夫、細田友雄、青木生子、岡惶治、勝木保次

◇会費に添えられた言葉を拾う

いち早く会員一五〇〇人を主張した一人です。二〇〇〇人をご勧誘下さい。われわれ旧会員はそろそろ交替、名誉会員でありたいと思います。

成蹊大学名誉教授　伊藤隆吉

♥

昨年は文部省より海外派遣を命ぜられ、諸外国の教育視察をしてまいりました。より広い心で教育に奉仕しております。

都立五日市高等学校教諭　青木俊一

♥

いつもセミナー・ハウス・ニュースその他のご案内をいただき有難うございます。交友館落成式にうかがいましたが、ますます立派にご成長になっている様子を拝見して、ご同慶に存じました。

芝浦工業大学講師　釜萢善一

♥

会費納入が遅れてすみません。5ヵ年分お送りしますので、過ぎた分をお埋め下さい。残がありましたら、将来の分として下さい。

慶応義塾高校教員　渡辺　愈

♥

来年早々に念願の保健センターが小さいのですけれど建築されますので、準備に多忙な毎日を送っています。

津田塾大学助教授　江尻美穂子

♥

共同セミナー百回記念のテレビや新聞拝見しました。相変らずご活躍のご様子何よりです。私も来年は一児の母になる予定。子連れ記者の奮闘ぶりにご期待（？）下さい。

日経新聞婦人家庭部記者　竹内　操

♥

二年間、日本を留守しておりましたが、このたび戻って参りました。

東京大学教授　小林善彦

♥

明年四月から一年間、国内研究に従事する予定ですので、貴ハウスにうかがう機会もできると期待しております。

東洋大学教授　八木江里

♥

毎年誕生カードをありがとうございます。いたずらに馬齢を重ねていることを思い知らされます。昨年度はフルブライト交換教授として渡米していたため、会費納入を失礼してしまいました。二年分をお送りいたします。一層のご発展を祈念しております。

専修大学助教授　竹村憲郎

♥

毎年春には新入生オリエンテーションゼミで大変お世話になっております。来春もまた宜しくお願いいたします。

東洋大学医療短大助手　山本よしゑ

♥

過日の体育史セミナーの際には色々ありがとうございました。

慶応義塾大学教授　笹島恒輔

♥

遅くなりました。ますますご発展で大変うれしく存じます。小生六二歳の誕生日を迎えました。老人は老人らしく青年の指導に当りたく思っています。

青山学院大学教授　森田信義

♥

仕事に追われているうち自分の誕生日を忘れ、美しいカードで思い出しました。どうもありがとうございました。

成蹊大学教授　宇野重昭

♥

盛夏の折には、数日を閑寂な御地ですごすことができ、久しぶりにお話をうかがうかたわら、新しい施設をご案内いただきありがとうございました。ますますお元気な飯田先生、また館員の皆様のお心のこもった応対。すべてたのしい思い出でした。大学セミナー・ハウスの一層のご発展を祈りつつ。

東京医科歯科大学教授　増田義男

♥

昨春、東京教育大学を定年退職、今年からは学会や義理の納め金等、少しずつご遠慮申し上げておりますが、千人会はじめから自分ですすんで参加した会であり、その上一年一年のメモリアルになりますので、続けられる限り続けさせていただきたいと思っております。

細田友雄

●館長日記から

低処高思の新春を迎う

元旦の朝は心がひきしまる。年が改まるからである。私は有難いことに今年も松下館の真理の鐘をついて元旦を迎えた。一四回目の正月である。◆除夜の鐘つきに立会ってくれたのが、宿直中の布施事業部長とその家族、飯田能子、田島澄江、浅野正行などの職員九名。この里の寺の鐘が聞こえて来る。暗闇の遠くに高尾山の灯が見える。空は高く晴れて星が光っている。風はなく空気はゆれない。わずかに残っていた樹々の葉が音をたてずに落ちている。閑かな茶室にも似た静寂が多摩の丘をつつんでいる。◆交友館で宿直アルバイトの学生達が腕によりをかけてつくったご馳走をたっぷりいただいた。あつあつの煮込みうどんやそばの後から田島澄江お手製の正月料理が運ばれた、なごやかな除夜の宴であった。そこには浄福の世界があった。◆交友館キリンサロンは、六ヵ月の経験で、すっかりハウスの中のオアシスになった。この建物が建つに至った蔭の協力者中島正樹、佐藤保三郎両氏との出会いに私は深甚な感謝を捧げたい。私に新しい境地を拓かせて下さるのは、こうした人達との出会いである。◆たくさんいただいた年賀状の中から一橋大学の細谷千博教授のものが眼に強く入って来た。「出発点の頃を知る者として、セミナー・ハウスは随分立派に育ったものだと思います」という添え書があったからである。草創期を知っておられる教授達こそ、まさに「衣は新に若くはなく、人は故に若くはなし」という春秋の言葉が教えてくれる「古いつき合い」の人である。◆除夜の宴が終って、外に出たのが深夜の二時。寒気が身にしみる。布施事業部長をつれて丘を一巡した。創立当初に建てた七つの宿舎群には歴史の重みがある。大浜岬とかやばしと上代池には深遠な友情の連帯がある。新しい国際セミナー館が、21世紀を背負う人々を集めるプログラムを求めている。高い星空の下で、私はもう一度、昨年六月、国際セミナー館を落成させた満足感を味わうことができた。それにしても稲山嘉寛、小山五郎、瀬川美能留の指導的財界人三氏がどんなにこの募金を支援して下さったことか。◆昨年10月13日、千人会員畏友布川角左衛門氏の喜寿祝いが催された。同氏は人も知るように岩波書店と共に育った出版人である。同氏は岩波茂雄氏が書かれた「低処高思」の色紙を秘蔵しておられた。喜寿記念にそれを私に譲って下さった。その理由は、当ハウスの英文標語を漢訳したのがこの四文字であるからである。◆今年は羊の年である。羊はその従順と忍耐強い性質のために、聖書の中にひんぱんに出て来る動物である。今年はまた国際児童年でもある。よき牧者は小羊を世話する労苦をいとうてはなるまい。◆春立つとはいえ、多摩の丘の寒さはきびしい。しかしわずかの時間でも丘を散歩するならば、句を詠む心が宿るのである。百花にさきがけて咲く記念樹の梅が春を告げているからである。

丘に咲く梅一枝に寒ゆるむ

寄付金報告

53年11月末現在

●ご支援を感謝して拝授いたしました。

＜指定寄付＞

大学共同セミナー第100回記念

【石のベンチ】　寄付金

一、〇〇〇円　石塚司農夫殿
一、〇〇〇円　安宅　光雄殿
一、〇〇〇円　山岸　健殿
一、〇〇〇円　青木美智子殿
一、〇〇〇円　広田ゆき江殿
二、〇〇〇円　神保　信一殿
三、〇〇〇円　タミ子殿
一、〇〇〇円　村山富士子殿
三宅　彰殿
三宅　和子殿
一、〇〇〇円　山田　欣司殿
一、〇〇〇円　讃岐　和家殿
一、〇〇〇円　佐竹　寛殿
一、〇〇〇円　中村　哲哉殿
二、〇〇〇円　飯田　修一殿
一、〇〇〇円　吉田美穂子殿
一、〇〇〇円　田中千世子殿
一、〇〇〇円　住田　友文殿
五、〇〇〇円　色川　大吉殿
一、〇〇〇円　芳山・森川殿
一、〇〇〇円　東條　秀光殿
三、〇〇〇円　飯田八千代殿
二、〇〇〇円　飯田　恵殿
三、〇〇〇円　桐生　冨久殿
五、〇〇〇円　熊田陽一郎殿
三、〇〇〇円　椚　国男殿
三、〇〇〇円　八王子市長殿
一〇、〇〇〇円　神山　妙子殿
二、〇〇〇円　小林　善彦殿
二、〇〇〇円　村上　光雄殿
五、〇〇〇円　荒井　良雄殿
三、五〇〇円　飯田宗一郎殿
三、〇〇〇円　山口　清隆殿
二、〇〇〇円　加藤　博殿
一、〇〇〇円　小山　右人殿
一〇五、〇〇〇円　酢屋　善治殿

第100回大学共同セミナー
指導教授一同殿

二、五〇〇円　第100回大学共同セミナー
参加学生一同殿

五、〇〇〇円　西村　陽子殿
一〇、〇〇〇円　中村　桂子殿

＜視聴覚施設・設備充実募金＞

一〇、〇〇〇円　千人会員　木村健二郎殿
三、〇〇〇円　東京外国語大学　中嶋ゼミ殿
一〇、〇〇〇円　早稲田大学教授　橋本仁司殿
一〇、〇〇〇円　日産自動車村山工場
総務部人事課　森孝太郎殿
一〇、〇〇〇円　第101回大学共同セミナー指導教授
荒井良雄殿
品田雄吉殿
白井佳夫殿
宮下啓三殿
山岸　健殿
三、八六〇円　第101回大学共同セミナー
参加学生一同殿

＜一般寄付＞

三、〇〇〇円　鮎川宗藤社中松月会殿

＜現物寄付＞

映画『黄金狂時代』の8ミリフィルムテープ（4巻）
学習院大学教授　荒井良雄殿

＜館長喜寿祝準備基金＞

五、〇〇〇円　高橋　泰蔵殿
一〇、〇〇〇円　東京女子大学　樋口美智恵殿
一〇、〇〇〇円　青山学院大学教授　佐藤和男殿

●利用状況

＊＝同月2回利用
＊＊＝同月3回利用

10月＝三、八九四人
11月＝四、一八八人

■10月

東海大学教授　藤家禮之助
日本女子大学助教授　麻原　美子
東京経済大学婦人問題研究会
国際基督教大学教授　原　一雄
東京理科大学建築学科
中央大学助教授　石崎　忠司
立教大学教授　田宮　裕
明治大学助教授　松瀬　貢規
東京都立大学教授　石村　善助
東京工業大学教授　長谷川健介
東京学芸大学リーダーシップトレーニング
中央大学助教授　池田　雄一
法政大学不動産鑑定研究会
千葉商科大学教授　矢沢　秀雄
東京都立大学教授　三浦　武
電気通信大学教授　林　一道
中央大学教授　丸尾　直美
東京学芸大学教授　阿部　猛
順天堂大学病院業務改善セミナー
早稲田大学教授　田村　恭
東京工業大学教授　江頭　淳夫
東京工業大学助手　近江　政雄
東京大学教授　溪内　謙
東京都立大学教授　大島　一郎
慶応義塾大学教授　池井　優
東京学芸大学助教授　高橋　稔
東京都立大学教授　速水佑次郎
武蔵工業大学助教授　桑原　哲郎
東京学芸大学助教授　野村　東介
東京大学助手　若林　正文
東京大学哲学研究会

一橋大学精神分析同好会
学習院大学フランス会
東京大学教授　関口　忠
東京大学教授　渡辺　昭夫
法政大学講師　石見　徹
電気通信大学計算機学科合同ゼミ
明治学院大学助教授　小野　哲郎
東京工業大学助手　大久保喬樹
東海大学教授　師岡　孝次
東京大学助手　野口　裕之
工学院大学教授　波多江健郎
一橋大学教授　島津　一郎
東京都立大学助教授　石井　昭
明治学院大学講師　遠藤　興一
津田塾大学教授　佳知　晃子
駒沢大学教授　遠藤　寿
神奈川大学教員研究会
早稲田大学講師　平野　文彦
上智大学助教授　アルフォンス・デーケン
専修大学教授　萩原　稔
日本女子体育大学助教授　河田　喬夫
産業能率短期大学教授　深井　秀夫
桜美林大学講師　永瀬　順弘
高千穂商科大学教授　大島　英雄
白梅学園短期大学教授　久保田　浩
第100回大学共同セミナー
大学教員懇談会世話人会
電気学会

予告

●第6回国際学生セミナー

主題　文化接触と日本—閉ざされた社会から開かれた社会へ—

期日　昭和54年3月19日～21日

＜ゲスト講演＞
一九八〇年代における国際社会の変動と日本の対応（佐伯喜一氏）

＜セクション演習＞
A日本語の国際性（野元菊雄氏）／B文化接触の場としての大学とその周辺—私の日本体験から—（戴国煇氏）／C脱国家の文化交流（三輪公忠氏）／D近代日本と留学（石附実氏）／E国際政治の変動と日本社会（中嶋嶺雄氏）

＜運営委員長＞　広野良吉氏

＜募集人員＞　一〇〇名（日本人七〇名、外国人三〇名）

＜申込締切日＞　3月7日

日本経営工学会
日本小児神経学会
クリスチャン文書伝道団
福音書店協力会
東京都公立保育園研究会
東京リコーダー教育研究会
東芝電子事業部
京王プラザホテル ＊＊＊
日本商業労働組合連合会
新東京日産自動車販売
スリーボンド
東京システム技研
多摩三菱ふそう自動車販売
日本化薬
TKC中央研修所
富士光機
日産自動車村山工場＊
東京労働金庫労働組合
明治屋
郵政省簡易保険局
日本電信電話公社
アムコ
ヘレンカーチス・ジャパン

【個人利用】
実践女子大学講師　河上　正秀
関西地区大学セミナー・ハウス
繊維高分子材料研究所　安宅　光雄
日本大学教授　大即　英夫
中村技術士事務所　中村　哲哉
日本金属工業　小倉　増三

【日帰り利用】
工学院大学専門学校教授　中西昌太郎
富士ファコム制御

■11月
日本女子大学教授　岡本　栄一
早稲田大学教授　川添　利幸
電気通信大学計算機科学科新入生合宿研修
東京工業大学教授　吉田　夏彦
慶応義塾大学教授　内山　正熊
上智大学講師　ハイメ・フェルナンデス
慶応義塾大学教授　鷲見　誠一
立教大学講師　近藤　隆雄
上智大学教授　川田　侃
東京大学科学思想史研究会
東京薬科大学教授　志田　信男
東京学芸大学英語科
中央大学教授　山田　卓生
中央大学教授　丸尾　直美
津田塾大学講師　星野　昭吉
成蹊大学教授　対木　隆英
中央大学通信教育司法研究会
早稲田大学教授　橋本　仁司
東京外国語大学教授　中嶋　嶺雄
東京工業大学教授　松田　武彦
早稲田大学教授　牧野　力
早稲田大学教授　由井　正臣
東京外国語大学講師　野村タチヤーナ
東京理科大学教授　富沢　稔
東京都立大学助教授　国井　隆弘
早稲田大学教授　村松林太郎
法政大学助教授　岡　孝
東京大学教授　渡辺　昭夫
学習院大学教授　河野　豊弘
東京都立大学教授　大羽　滋
東京都立大学理学部生物学科
立教大学助教授　北岡　伸一
中央大学教授　那須　宗一
津田塾大学講師　野村　文子
慶応義塾大学助教授　関根　智明
芝浦工業大学教授　十代田知三
明治大学助教授　松瀬　貢規
慶応義塾大学教授　有賀　一郎
中央大学学術連盟
明治大学教授　萩原　稔
明治大学助教授　富永　昭
慶応義塾大学教授　内山　秀夫
明治学院大学教授　宮野　彬
法政大学助教授　矢田　俊文
工学院大学教授　中島　康孝
東京YWCA専門学校
産業能率短期大学助教授　高岡　正
帝京大学教授　早瀬　利雄
立正大学教授　杉沢　新一
高千穂商科大学助教授　名越二荒之助
トラベルジャーナル旅行学院　大庭　治夫
国士館大学講師　相馬　順一
桜美林大学教授
日本女子大学附属高等学校高校生活研究セミナー
科学史研究会
日豪合同セミナー（日豪学術文化センター）
哲学研究会
第101回大学共同セミナー
核融合理論研究集会
天体物理学研究会
放電研究グループ若手セミナー
地域構造研究会
日本基督教会東京中会日曜学校委員会
水曜会
日本基督教会東京中会青年部
久遠キリスト教会
日本カトリックボーイスカウト指導者協会
新生活運動協会
東芝電子事業部 ＊＊
日本能率協会
郵政省簡易保険局
酒類流通研究所
日産自動車村山工場＊
日野協力会
東京コカコーラボトリング労働組合
中村屋
千代田運輸
税務実務勉強会
山村硝子＊
八王子大丸労働組合
郵政省貯金局
ソフトウェアマネジメント
アムコ
三木証券

【個人利用】
東京大学教授　山口　重克
菊正宗酒造　寺西　良彦
慶応義塾大学院生　深沢　敦

【日帰り利用】
大学連合青年の船
市川きもの学院　菅野　芳彦
中央大学教授

●編集後記

いろいろなことが重なって、本号の編集も思うにまかせず年を越してしまったが、ようやくここに第一〇〇回大学共同セミナーの模様を再現して、発行できることは編集子の幸せである。

思えば昨年は、諸行事と「一〇〇回」の企画に明け暮れて、あわただしさの中にうち過ぎたが、そのピークとなった10月の四日間をふり返りながら、その成果を活字にまとめあげることは、楽しい作業であった。（能）